

主 題	看取りケアにおける「家族」の関わりとその位置づけ
副 題	家族と共にある看取りを目指して

看取り	家族	研究期間	15 ヶ月
-----	----	------	-------

事業所	社会福祉法人白十字会・特別養護老人ホーム・白十字ホーム		
発表者：長田 純一（おさだ じゅんいち）		アドバイザー：松下 かほる（まつした かほる）	
共同研究者：			

電 話	042-392-1375	E-mail	juniccio@gmail.com
F A X	042-392-1255	U R L	http://www.hakujuji-home.jp/

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	「トトロの森」のモデルとなった、東京は東村山市の八国山に建つ、定員 170 名の従来型特養です。併設の白十字病院をはじめ、老健、デイサービス、小規模多機能などの施設と連携し、地域に開かれた施設として、地域での総合的・包括的なサービスに努めています。ベテラン職員の経験と若手職員のエネルギーとで、利用者の「安心・いきいき・心豊か」な生活の提供を目指しています。
------------------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

白十字ホーム 2 号館（2 フロア・定員 60 名・認知症棟）で、最初に「看取りケア」を行ったのは平成 22 年、A さんのケースであった。当初、看取りケアに対する職員の認識は、単に「病院への入院や積極的治療を望まず、ホームで亡くなること」「亡くなる場所を提供し、寄り添う」という程度のものであった。看取り終了後も、ケアの経過と内容についてあまり細かく突き詰めては振り返ることもなかった。

しかし、A さんご家族は頻回に面会があり、職員もご家族と話をし、関わりを持つ機会に恵まれた。その中で「看取られるご本人⇄ケアする職員」だけの構図より良いものが、ご家族を中心にする事で、可能なのではないかと思われた。「家族のための看取り」「家族と共にある看取り」ということについて、考え始める契機が生まれた。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

ご家族に、利用者の傍に＝中心に来て頂くことにより、下記のようなことが期待された。

- ① 利用者が安心する・嬉しいと感じる・寂しく感じない
- ② ご家族が、利用者の死をきちんと受け入れられる場所と時間、そして説明が得られる
- ③ 職員が、ご家族との関わりの中で、利用者についての知識＝情報を得ることで、利用者への思いとケアを強め、深めることが出来る

《3. 具体的な取り組みの内容》

【Aさん・104歳】

看取りになってからも少量のみ経口摂取可能。お声も出る。好きなウナギなどを栄養士が加工調理。家族が入れ替わり面会に来る。家族も高齢であり宿泊することは無かった。「皆さんにみて頂いて本人は幸せだったと思います。私たちも安心して看取ることが出来ました。」

【Bさん・95歳】

ご親族に牧師さんがいて、ご本人も信仰していた。ご家族は宿泊されることがあった。死後は、浴衣ではなく洋服（ブラウス）をご希望された。

【「看取り確認票」の作成】

準備や死後の、丁寧かつ速やかな対応のため、基本事項をご家族に確認するための帳票を作成し、職員がすぐ確認できるよう、看取りケアプラン・フェースシートと共に職員室机上に常設した。夜勤職員が急変時にもやるべきことが分かり、安心感につながった。

【Cさん・98歳】

声かけに反応なし。Cさんを囲んで、家族と職員がCさんについて会話する。どんな親だったか、怒ったりしたのか、好きな食べものは…。ご家族が昔の写真や置物などを持ち込み始める。チアノーゼが始めると「今日泊まります」と。翌日「いや一何年ぶりかなー母ちゃんと一緒に寝るなんてー」とはにかむ。死亡時には立ち合えず。

【Dさん・99歳】

ご家族が毎日交代で来訪、宿泊される。ご家族との関わりの中で「運動（会）好き」「明るく賑やかなのが好き」とわかり、部屋に万国旗を飾る。カラオケ大会を部屋の中で開催する。ご家族より「静かにしていなさいいけないのかと思っていました。明るく賑やかに出来て良かったです」と。ご家族に看取られお亡くなりになる。

《4. 取り組みの結果と考察》

「看取りケア数／死亡者数」は、下記の通り推移している。（※白十字ホーム2号館）

▶平成23年：5／16名（31.3%）

▶平成24年：4／10名（40.0%）

▶平成25年：7／13名（53.8%）

▶平成26年：4／12名（※6月現在）

「看取りケア」が増え、私たち職員も経験を重ねることで、少しずつ、家族と共に「利用者を送る」ことが出来るようになってきている。

看取りケアは職員だけが行うものではない。家族の為のもの、家族と共に行うものである。

「親をきちんと送ることが出来た」という安堵したような家族の表情は、亡くなった利用者也望むもののはずである。

そして、家族との関係は本来的には「看取り」になる前から取り組むことが必要なことである。実際には、終末期に入る前から「医師によるムンテラ」を関係部署の担当者立会のもと複数回開催し、互いに理解し合う場を作ることが、ご家族の安心感と信頼感を作るのに重要な機会となっていると思われる。

《5. 反省点》

反省点として、やはり「看取りになる前に出来ることを増やすべき」が挙げられる。

▶「“看取りケアになったからウナギ”では遅い（ST）」▶「利用者の生活歴、どんな人だったかを、ご家族からもっと伺い知っておきたい」等、今後、対応したい。

また、ご遺族が看取りをどう感じていたのかを知る活動を、追跡アンケート等により実施し、振り返り、ケアの質の向上に取り組むべきと考えている。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表は、白十字ホーム個人情報保護方針に基づいています。

【メモ欄】